化怪2-BA . KEni-

織姫 鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

化怪2 - B A ・ K E n i -

【Nコード】

N3569T

【作者名】

織姫 鳥

【あらすじ】

夜、決まった時刻に町の公園の中心にある大きな榎のまわりを壺が勝手に飛び回るといふ妙な噂を確かめるべく、二人の男子高校生はその公園に向かう。そこで彼らが見たものは…。

樹木子・前編・

1.

「おい佳都よしと！何ゆっくり歩いてんだ。夜が明けちまうぞ」

8月の蒸し暑い夜中に、2人の男子高校生（佳都よしとと慎也しんや）が道を歩いていた。

「慎也…マヂで行くの??」

「当たり前だろ。あの噂が本当かどうか確かめに行くのさ」

「公園の中を壺が飛び回るってヤツだろ??どう考えても間違いに決まってるじゃん…」

午前1時30分頃、佳都よしとたちの住むこの町にある穂多羅ほだら々（ら）古戦場公園（400年ほど前にある武将とある武将が戦って、ある武将が敗れた地らしい…って、何のこっちゃ）の中心にある大きな榎のまわりを、高さ40センチほどの壺が飛び回る！！という、くだらない噂である。

「5人の目撃証言があってもか？」

「3人は酔っ払いで…えーっと、1人はウチの学校一の変人S、も

う1人は徘徊癖のあるじーさんだったか。まともな人間がいねーじやねーか…信じられるかよ」

「黙らっしやい！一体何をどう見間違えたら空飛ぶ壺になるんだ」

確かにそこは奇妙なところではある。

しかしそれだけではなく、目撃場所や時間まで、5人の証言が見事に一致しているのだ。

「壺でないにしても、きつとミステリアスな何かに違いない。例えば、妖怪とかな」

「アホか…」

「おっと、話しているうちに、公園に着いたぞ。さてさてさて…」

「お前ってさ、…もしかしてオカルトマニア？」

「佳都、あそこの茂みで待ち伏せしようぜ」

慎也は夢中になると俺の…というか人の話を全く聞かなくなる。

妖怪か…馬鹿馬鹿しい。

そんなのがいたら是非友達になって…みたくはないな…

ふと左腕の時計を見ると、すでに午前1時を回っていた。眠い。

早く帰ってー。

「おい佳都！あそこに何かいるぞ」

「え？何？もう見つけたの」

慎也が指差した先に、確かに黒い影が立っている。

この公園の明かりは午前1時になると消えてしまうので、真っ暗闇の中につつすらと見えるだけなのだが…どう見ても壺には見えな
い。

まあ大塚の下ということだけは一致しているが。

「ついに出たか妖怪！」

「あれ、人だよな」

「出たな人型の壺！」

「どんな壺だ」

慎也はかなり興奮していた。

こうなるとどんなツッコミを入れても流される。

「俺たちみたいに空飛ぶ壺を見に来た物好きだろう。あ、俺を物好きに入れないでくれよ」

「行くぞ佳都！飛び去ってしまう前に捕まえるんだ」

「お前頼むから人の話聞け」

慎也はカツコ悪い抜き足で、茂みに隠れながら移動を始めた。
仕方ないから、俺もそれに続く。

影が大榎に隠れたところで、俺たちは榎に徐々に近づいていった。
はあ…何やってんだ俺は。

そしてついに大榎の下にたどり着いた。

反対側には例の影…おそらく人が…つて、あれ？

「慎也、何もいない」

「は？マジで？…ほんとだ。嘘だろ」

「おかしいな、確かに人影だったんだが」

「妖怪だよ妖怪！瞬間移動したんだよ！ちくしょー、逃げられたか」

「…でも噂の壺って、瞬間移動じゃなくて空中浮遊だろ。そもそも
形が壺じゃなかったし…」

「きつと壺以外にも、この公園には何かいるんだよ。それがわかつ
ただけでも大収穫だ。佳都！明日も来るぞ」

「…マチかよ…」

暗闇に慣れた目でも慎也の顔はよく見えないが、ヤツの目はきつと

輝いているに違いない。
どうせ言っても聞かないだろうから、俺は心の中で主張する。
俺は来ないぞ。

「ねえ」

突然後ろから声が聞こえた。

不意を突かれたので、俺も慎也も飛び上がってしまった。
振り向くと、10歳くらいの女の子が立っていた。

「だだだ誰??」

「ん…もしかして、さっきここにいた人？」

ビビりまくる慎也を無視して、俺は女の子に尋ねた。

「君も、空飛ぶ壺を見に来たの?…危ないよ。女の子がこんな時間に独りで来ちゃ…」

「違うよ。私、待ってたの」

「待ってたって…誰を?」

「あなたたちを…」

気のせいだろうか。
さっきまで蒸し暑かった空気が、一気に凍りついたような寒気を背中に感じた。

2 .

「おじゃまします」

ある土曜日のお昼時。

菅原茅野は可愛らしい声で挨拶した。

茅野は詩季美の高校の後輩で、現在は3年生である。

「いらっしゃーい。ゆっくりして行ってねー」

明るくこう言うのは僕、機殿真実（現在大学4年生。将来のビジョン無し）の彼女の楠詩季美である。
僕の家だつての。

彼女はすでにこの世の存在ではない。

大学3年生の時に交通事故で他界し、天に召されずにいる。

つまり彼女は幽霊である。

なぜ僕が幽霊と付き合っているのかというと…それは長くなるので省略することにしよう。

簡単に言えば、僕は幽霊にとり憑かれているということだが、それが不思議なことに恋愛に発展してしまったのだ。

まったく世の中何が起こるかわかったものではない。

「今お茶用意するから、ちょっと待っててね」

「あ、構わないでください」

「そんなに気を遣わなくてもいいよ。どうせウチのマイペースな両親はまたどっか行ってるし」

旅行好きの僕の両親は、置手紙と適当な食事を残してよく出掛けていく。

平日もどこかに行っているようだが、土日は必ずといっていいほど家にいない。

まあ、楽っちゃ楽なんだけど。

「はい…」

茅野ちゃんはとっても物静かで真面目な娘である。

しかしその反面ストレスを極度にためこんでしまう性質があり、以前失恋によるストレスが限界を突破し、内に強大な霊力が生じて『生霊』と化してしまったことがあった（『生霊』とは、ここでは度重なる負担によって心の奥に目覚めた第二の人格的存在を指す。主人格）。

その『生霊』は最終的に彼女の体から抜け出し、恋愛を成就させるべく恋敵をとり殺そうという強攻策に出たのである。

なんとか『生霊』を退治し、心を安定させることで無事普通の人間に戻ったのだが、もうしばらくは心のケアが必要だということだ、

僕が彼女のカウンセラーになっているといたところである。
生霊事件からもうだいたいぶ経つが、なかなかいい感じである。

…って勘違いするなよ？

関係じゃなくて心の状態がいい感じなんだ。

二股なんぞかけますか。

「んあれ、お茶が無い」

作っておいたはずのお茶が無くなっていた。

「茅野ー、無いつてー」

「いや、さっきもそうだけど、幽霊のお前が言っても普通の人間である茅野ちゃんが聞こえるわけ」

「私、そんなに喉渴いてないので大丈夫ですよー」

あれ、聞こえてる。

「何で??」

「あの子、霊力が目覚めたらしいのよ。あんたといっしょ」

僕には生まれつき神や妖怪その他の見えない霊的な存在を見たり感

じたりできる能力、つまり霊力があつた。
だから、今までさまざま妖怪に遭遇してきたのである。
霊力って突然目覚めたりするものなのだろうか。

「あたしもびつくりしたんだよ。見えてないと思って学校に遊びに行ったらお辞儀されちゃうんだもの。聞いてみたら、生霊事件の一月後くらいにいろいろ見えるようになったそうよ」

「何が原因かな」

「『生霊』の力が作用したのかしら。それともご先祖さんに霊能力者がいたとか。遺伝するらしいのよね、霊感とか」

「靈感の隔世遺伝か。僕もこの靈感はじいちゃん譲りだからな。ありえない話ではないな…まあ、お前と話せるようになったのは良かったとして、これからいろいろ大変だぞ。僕みたいに」

「そうね…あんたみたいに妖怪に狙われるかもしれないしね」

ただ彼女のカウンセリングをしているだけではいけなくなった。
…責任重大だこりゃ。

「しかしおかしいぞ」

「何が」

「何でお茶の中身だけ無くなるんだ」

先ほど冷蔵庫から取り出した飲み物を入れる容器の中は、飲み物の代わりに空気で満たされている。

「…あなたがボーっとしたまま、中身を入れたと思ってカラの容器を冷蔵庫に入れたんじゃないの」

「…ちよつと馬鹿にし過ぎじゃないか」

「そうじゃないとしたら…ちよつと冷蔵庫開けてみて」

そうじゃないに決まってるだろ！…と思いつつ、僕は冷蔵庫をもう一度開けた。

ふー、蒸し暑い夏にはこの冷気がたまら…ん?!

突然気持ちよさが寒気に変わった。

ただの寒気ではない…これは。

「冷蔵庫の中に…何かいるわよ」

「うひょー、さっそく出たか、茅野ちゃんを狙う妖怪め。成敗してくれる」

「落ち着け真実。さあ、出てきなさい」

詩季美がそう言うと、冷気が充実して膨れ上がり、徐々に形を成し

てきた。

夏なのに寒さ（悪寒）がハンパない。

そしてなんと、薄い水色の着物と真っ赤な帯を身に付けた、詩季美そっくりの女性が姿を現したではないか。

「そう怒らんといてくださいな。ここしか居場所が無かったんです」

声まで詩季美にそっくりであった。

しかしこの女性の方が若干落ち着いている感じがする。

「…『雪女』ね」

「雪女なんてそんな。雪ん娘ゆきこって呼んでくださいな」

…何だろう。

自分が知っている『雪女』とはだいぶ違っていた。

『雪女』って、遭遇したら殺されるかもしれない危険な妖怪じゃなかったっけ？

まあ人間と関係を持って子を生じたという話も聞くけど…。

「初めまして。雪ん娘ゆきこの凍子こいこと申します」

「あ…どうも初めまして…」

「真実！鼻の下が1メートル以上伸びてるわよ」

詩季美があからさまな嫉妬。
そんなに伸びたらもはや妖怪だ。

「初対面の挨拶をしただけでしょっが」

「ホントかしら。茅野やこの女への接し方とあたしへの接し方との間に、とてつもなく大きな差を感じるんですけどッ」

…これだから幽霊は…。

まあ、幽霊から嫉妬深さや執念深さを取ったら他に残らんか。

「ところで、あなたは何でウチの冷蔵庫の中に」

「真実さんは私を覚えていらっしやらないようですけど、私は一度、あなた様に助けられているんですよ」

「…え??? 初対面では…うーん、覚えてないだけなのかな…」

やばい。

全く覚えがないぞ…。

会っていたら絶対に覚えてるはずだ…全然違う姿になっていなければ。

「去年の冬にある駅のホームで、線路側に落ちそうになった私を助けてくれました。あの時私は人間の女性に化けていて、旅行中だったんです。でも、あまり暖かいところに長く居たもので体が弱ってしまつて、気を失いかけたところをあなたに受け止めていただきました」

おお、思い出したぞ。
せえーふ！

「あ、あの時の女性が君だったの！そう言えばそんな感じの話し方だったような…」

「顔は覚えてないのかよ」

詩季美はまだ怒り調子である。
いいかげんにしなさい。

「顔は変えてなかったんですが、髪型が全然違っていましたもの。分からなくてもおかしくありませんわ」

「確かにその昔のお姫様みたいな長髪ではおかしいよな」

「それは置いておいて。ですから！私は恩返しのために、冷蔵庫に潜んで食べ物を保存し続けていたのです！この年代物の冷蔵庫、だいぶ効きが悪くなってましたよ」

「それで、家のお茶も（無断で）飲んだんだよな。でも（可愛いから）許そう。僕は寛大だからな。」

「え、本当ですか。それぞれ買い換ええないといけ……」

「そ、それは困ります！私のお仕事が無くなります！」

「雪ん娘さんはマジで焦っている。可愛い。」

そこに詩季美がすかさず口を挟んだ。

「何が仕事よ。この家に居座りただけでしょーが！恩返しとかいって、本当は真実を誑かしにきたんでしょー！」

「まあ、なんと失礼な幽霊だこと。あなたこそ、真実さんを誑かしているのではなくて？」

「ぬわんですってゑええ！！」

「まままま、まあまあ……」

ちくしょー！。

妖怪って面倒くせー！。

「真実さん、姉さん！！ちょっと来てください！」

居間から不意に茅野の声が飛び込んできた。
騒がしかった台所が一瞬で静かになる。

「どうかしたの茅野？」

詩季美は急いで居間に飛んでいった。
僕と雪ん娘ゆきこさんもそれに続く。

「これ、観てください」

ついさっきまでついていなかったテレビが、忙しく映像と音を放出していた。

僕たちが冷蔵庫の前でグダグダやっていたので、待ちくたびれてしまったのだろう。

いや、悪いことをした。

と、それはさて置き、観てみるとやっているのはお昼のニュースであつた。

『今日未明、市 町穂多羅々（ほだらら）古戦場公園の敷地内で、男子学生2人の遺体が発見されました。2人の遺体はすでにミイラ化しており、警察は殺人事件として捜査を進めるとともに、死亡時

刻と殺害方法の解明を急いでいます…』

「…うそだろ…穂多羅々古戦場公園って、隣町じゃないか…」

「ミ、ミイラ化って、そんなに簡単にできるものなんですか…」

茅野が青ざめた顔で僕に問いかけた。

…知るかよ、そんなこと。

「もしかすると、妖怪の仕業かもしれないね…」

凍子さんは落ち着き払って言った。

もしかすると、なんていう割には、彼女の目は確信に満ちている。

「だとしたら、吸血系の妖怪ってことか」

詩季美も、さらりと恐ろしいことを言った。

3 .

「あー、ヒマだ」

読者の諸君、俺の名前はかがきほろきくお榊原菊雄だ。

現在の職業(?)は幽霊だ。

幽霊やっています。

交通事故で逝きました。

詳細は面倒だから説明しない。

さつきはついヒマって言うちまったけど、やることはある。

そのために俺は現世に留まっているんだからな。

可愛い妹の樹里きじりの守護。

それが俺の今の使命だ。

あと愛しのハニー（詩季美）と結ばれること。

これは目標だ。

全然振り向かせられないけど。

菊ちゃんシヨック！

「以上で菊ちゃんの自己紹介は終わります」

「妹の守護とはいえ、ずっとつきまとうのはさすがに気が引けるんだよな」

と言いつつ菊雄は今、妹のいる教室の片隅でのんきに浮かんでいる。妹の樹里は14歳の中学2年生。

物静かで思いやりのある性格で、何より可愛いため、クラスの人気者である。

だから何も心配することは無いのだが、妹の、樹里のあんな顔を見てしまうと。

俺が死んだことを知った時の、あの泣き顔を見てしまうと…。

妹を悲しませた、泣かせてしまった自分が憎くて仕方がなかった。罪悪感。

俺が成仏できなかったのは、そのせいだ。

妹を、家族を悲しませた俺は、とても罪深い人間。

しかしもう人間としてはその罪を償うことはできない。

だから…だから幽霊として、せめてあいつの、家族の守護霊となつて償いをする。

俺の魂がきつと、そう決断したんだ。

『榊原 好物つけ麺 俺イケメン』

…何かどっかで聞いたことあるなあ。

『妹に 靈感あつたら いいのにな』

会話できるもんなあ。

「おい、そのストーカー幽霊」

菊雄が呑気に歌を詠んでいると、不意にどこからか声がした。

「な、何をツ。人を、じゃなくて守護霊をストーカー扱いするとは出てこい！」

「やっほい」

窓から風とともに、男の子の幽霊が教室に入ってきた。

「うわお！」

「おいオマエ、こんなところで呑気に歌なんか詠んでる場合じゃないぞ」

「え？何があつ…と、その前にお前は誰だ」

「ボクの名前は梅宮つめみや明日英。見ての通り幽霊だ」

「ああそうかい。よろしくな」

ち、何かいけ好かないボウズだな。

「そんなことよりオマエ、ここで呑気にしてる場合じゃないんだって」

「だから何なんだよ？」

「ここに強くて邪悪な妖怪が向かってるんだ」

「…何だと!？」

「しかし…まだその妖怪の力を感じないな…よし、襲撃に備えて…」

「何を言っている？もうすぐそこまで来ているぞ？」

「…え？」

菊雄は言葉を失った。

やばい。

妹が、この学校のみんなが。

…その前に、何故俺はその妖怪の気配を感じない？

明日英は感じているのに…。

「大丈夫かよ。ボクがオマエに近づいた時も気付いてなかったし」

確かにそうだ。

明日英の気配にも俺は気付かなかった。

たるんで…いるのか。

何か、何かおかしい…。

何だ。

何故だ。

…！

「オマエ、『安心』しただろ」

確信に満ちた表情で明日英は言った。

「…？」

「自分の妹の守護をしてきて、もう自分がいなくてもいいんじゃないか、と『安心』したんじゃないのか？『この世への執着』は幽霊の存在意義であり、幽霊の全てだ。それを失くせば、幽霊は終わる。まあ、成仏できるってことだから、これは喜ぶべきところかな。良かったな。もう少しで成仏できるぞ」

「…」

菊雄は黙っていた。

そう、彼は「安心」してしまったのだ。

そのせいで、彼のこの世に対する執着心が揺らぎ始めた。だから力を失い、気配を感じなかったのだ。

（自分がいなくても、妹は平和なんじゃないか？）

これは幽霊として致命的なことであった。

しかし、普通に考えれば明日英の言うように、これは成仏できるチャンスである。

完全に執着を拭い去ることができれば、もうこの世に縛られることはなくなるのだから。

「おめでとう。安心して、多分天国だと思うけどいってくれ。妖怪はボクが何とかする。ここはボクの学校なんだ。荒らさせてたまるか」

明日英は真剣な顔つきで言った。

彼は生前、この中学校の生徒だった。

学校が始まって以来の秀才で、成績が常にトップなのはもちろん、すでに小説家デビューもしているほどであった。

将来を嘱望され、自らも民俗学者を目指して猛勉強をしていたさなか、悲劇が彼を襲う。

14歳の夏、白血病を患い入院。

治療の甲斐も無く、その翌年にこの世を去った。

今から約3年前のことである。

やり残したことがあまりに多すぎて、彼の魂はうかばれるはずもなかった。

この学校で、自分の学校で、学者になるための勉強がしたい。研究がしたい。

死んで学者になる夢が絶たれたとしても、勉強だけは…。

彼の魂はその一心からこの学校に留まり続け、ひたすら勉強、研究を繰り返していた。

いつか心が晴れ、天国へ旅立つことができると信じて…。

しかし今、得体の知れない邪悪な妖怪によって、唯一の自分の場所が乱されようとしている。

そんなこと、絶対に許さない。

(荒させてたまるか)

「なーにが安心して天国へいけだ馬鹿野郎」

黙っていた菊雄が突然言い放った。

「何？」

「この学校はお前だけのものじゃないんだ。俺の母校であり、妹の学校でもある。そこがぶっ壊されようとしてるんだろ。安心できるわけがない」

「だけど、幽霊としての力の無いオマエに……」

「?!」

その時、明日英は菊雄から凄まじい力を感じた。

（え？）

「護るものを得た守護霊は強いぞ」

「…ふ。なるほどな。オマエに存在意義ができたわけだ」

「そういうことだ。…お、その妖怪さんが校門をくぐるうとしているぞ。ちよっくら挨拶してこようではないか同士」

「…そ、そうだな」

二人の幽霊は窓からひよいと身軽に飛び降りると、そのまま一直線に校門へと急いだ。

校門の前には、緑色の髪をした少女が一人立っている。

「よう」

菊雄がさつと少女の目の前に立ちふさがる。

明日英も、その隣に降り立った。

「こんにちは」

少女の口から出たのは、誰もが使うごく普通の挨拶表現。しかし何故だろう。

その言葉の裏にとてつもない威圧感と殺意を感じるのは。

「おーこんにちはーお嬢ちゃん」

菊雄はわざとらしく彼女の挨拶に答えた。
奇妙な雰囲気のまま、妖怪たちの会話は続く。

「わたしに何か用？」

「…君こそ、この学校に何か用か」

明日英の問いかけに対し、彼女は。

「そうね…若い血」

「…何？」

幼女の雰囲気が一変する。

「若——————い血が——————
——————っばい欲しいなっ——————!!——————!!」

彼女は叫び声とともに、緑色の髪の毛をまるで植物の蔓のような形に変化させ、50mほど離れた場所にいた野良ネコに、目にも留まらぬ速さで巻きつけた。

ネコは耳を塞ぎたくなるような奇声を上げ、苦しがる。

しかしその体は徐々に萎んでいき、ついにはミイラのようにカラカラになってしまった。

「つぶぶ…」

恐ろしい幼女と妖女の行動に、戦慄する二人。

「おい…これは…」

一時の沈黙の後出た菊雄の言葉に、明日英は冷静な口調で答えた。

「ああ、間違いない。…吸血妖樹『樹木子』だ」

ばるう狐

1 .

放課後、茅野^{わたし}は部活動をしていないので、真っ直ぐ家に向かうことが多い。

ちよつと前に好きだった人に憧れて始めたエレキギターは、失恋したら嫌になるのかと思ったが、不思議と頑張つて続けられている。

学校に軽音部が無くやっている友達もいないため、家で一人で練習しているのだが、それはそれでまた楽しい。

大学に入ってバンドを組むのが、現在の目標となっている。

今日も早く帰って練習しようと思つて歩いていると、校門のところ
に少女が一人立っているのが見えた。

小学校2年生くらいだろうか。

左右に髪の毛のリボンで束ね、キツネ耳の飾りをつけている、可愛らしい女の子。

見かけない顔だった。

その子がこちらに向かつて手招きを始めた。

(わ、私?)

後ろを振り向いても誰もいなかった。

わけもわからないまま、私は少女に近づいた。

「お姉ちゃん」

女の子は私に言った。

「なあに？」

「負んぶして」

え？

うーんと…。

…見るからに元気そうなのだが…と思いながら、尋ねてみる。

「どうしたの？具合でも悪いの？」

「負んぶしてほしいの」

何が何でもしてほしい、という目だった。

どうすればいいかわからなかったが、不思議とこの子を放ってはおけないという気持ちになった。

周りには誰もいないし…。

「…わかった」

彼女はぱつと笑顔になる。

なんて可愛らしい子なんだろう。

…ずるいよ、その笑顔は。

「ほら」

私は彼女に背中を向けて、しゃがんだ。

「よっこら…お、おう?!」

重い!

嘘でしょ??

肩に掛けている鞆の重さを差し引いても、いくらなんでも重すぎる。

成人男性くらいあるんじゃない??

…そんな人背負ったことないけど。

「お姉ちゃん、大丈夫?」

「はは、うん。だ、大丈夫だよー…」

大丈夫じゃないよう。

しかし、何故だろう。

重かったら下せばいいのに、下すことができない。

…仕方なく、よろよろと歩き出す私。

で、どこへ連れていけばいいの?

「ね、ねえ。名前は何ていうの?」

「御鈴みすずだよ」

「御鈴ちゃん、おつちはどこ？」

「信号、赤だよ」

おっと。

…って、もっ…。

信号を待ち、青になってから渡る。

これを三回繰り返し返した後、再び家はどこなのか聞こうとすると、後ろの方から何やら気持ちよさそうな寝息が。

えーん、寝ちゃってるよ。

御鈴ちゃん。

重いってばー。

しかも背中にくっついてるみたいに下せないよ。

何で???

重くても下せない。

だんだん自分の家が近くなってくる。

この子を私の家に置く余裕なんて無いよ。

誰か助けてー。

…と思いつつ、御鈴ちゃんを背負いながら、私は歩き続け…とうとう自分の家の前まで来てしまった。

「み、御鈴ちゃん、悪いんだけど、お姉ちゃんの家に着いちゃったからさ、もっ下り…ってあれ?!」

後ろを見ても、背負っていたはずの少女の姿が無い。

「重さ」は感じるのに。

「ちょっと…ど、どうなってるの？わっ！！」

感じている重みが急に増し、私は思わず尻もちをついた。後ろを見ても、周りを見渡しても、やはり少女はどこにも見えない。あれほどあった重みも、嘘のように消えてしまっていた。一体、何だったの…??

家の中に入って、自分の部屋のベッドに置かれている物を見て、私は更に驚いた。

洋画のDVDにベースギター、ベージュのジャケットなど、私が欲しいと思っていたものばかりであった。そして机の上には、葉書くらいの大サイズの紙切れが一枚置いてあり、それにはこう書かれていた。

『お姉ちゃん、ありがとう』

この不思議な出来事があった次の日から、私にはみんなが見えていないものが見えるようになっていた。登校中に白装束のお兄さんにいきなり声掛けられるし。

「やあ茅野ちゃん、今日もいい天気だね」

帰り道、変な足音がすると思つて後ろを見たら、半透明ののっぽさんがついてきてるし。

家まで来たところでサーツと消えちゃったから、何もされずにすんでよかつたけど。

そして今日、学校で授業受けてたら、窓のところに死んだはずの先輩の詩季美姉さんが座っていた。

そりゃ、びっくりしたけど、姉さんは私が生霊になった時に夢の中に現れて助けてくれたから、また会いに来てくれたんだと思つて嬉しかった。

お辞儀してみたら、逆に驚いてたっけ。

放課後、私は誰もいなくなった教室で姉さんと話をした。

「姉さん、来てくれてたんだね。…やっと会えたんだ。…ありがとう」

「う、うん。ていうか茅野、あんた幽霊わたしが見えるようになったのね」

「うん…私が姉さんに助けてもらつてからすぐにね。他にも、姉さんと同じような人ゆっぺいとか、変なお化けとか、いろいろ見えたよ」

「そっか…そりゃーあんた、これから大変になるわよ…」

「うん…だけど、姉さんと話せるし、いいんだ。それに、いいお化けがいるってこともわかつたし」

「いいお化け??」

「うん。三週間くらい前にね…」

私は、生霊から開放されてからすぐに起こった、あの不思議な女の子の話をした。

「へえ…あんだ、よく頑張ったわね」

「え？」

「多分それ、『ばろう狐』って妖怪よ。急に負んぶしてって言ってきて、背負うともものすごく重い。その子も重かったでしょ？それで、そのまま重さに耐えて家に連れて帰ると、金銀財宝とか、富が手に入るの。茅野も頑張って連れて帰ったから、欲しい物がもらえたのよ」

「そ、そうなんだ…」

「心の綺麗な人にしか富は与えないから、やっぱり茅野の心は澄んでいるんだね、私に似て」

私は笑った。

それを見て、姉さんも笑った。

しばらくして、姉さんが言った。

「ねえ茅野、今度家来ない？」

「え？あ、姉さんのお墓参りですか？じゃなくてお仏壇にお線香を
…」

「ちがうちがう！今の私の家は真実まことの家！あいつ、喜よろこぶわよ、幽霊
を見る仲間ができたって」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3569t/>

化怪2-BA . KEni-

2011年10月9日02時22分発行